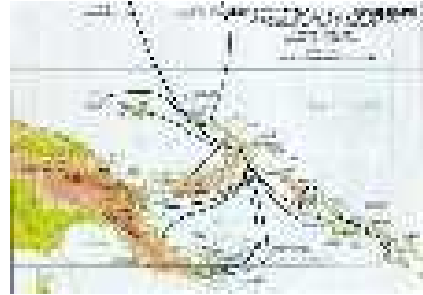


第百八十一話 死んでも帰れぬニューギニア

「ジャワの極楽、ビルマの地獄、死んでも帰れぬニューギニア」と帰還兵達に評されたニューギニア戦線だが、大東亜戦争の中でも取り上げられることが意外に少ない。作戦期間の長さ、戦没者の多さ、その過酷な戦いや生活状況等々多くの論点があるにも拘らず、意外に知られていない。多分に、大東亜戦争は日米戦であり、太平洋の戦いであるとの理解が原因で、その比重が低いのだろう。

1 ニューギニア作戦の概要

日米英蘭戦開始間もない1942(S17)年1月29日、陸海軍中央協定が締結された。日本の作戦目的は、「英領ニューギニア・ソロモン群島と豪州の連絡遮断、豪東北方海域の制圧」であり、ニューギニアについては「ラエ、サラモア攻略後なしうればポートモレスビーを攻略する」とした。この決定により1942年3月8日、第四艦隊(井上成美海軍中将)と陸軍南海支隊は、東部ニューギニアのラエ、サラモアに上陸し占領した。



これがニューギニアの戦いの始まりであり、ポートモレスビー攻略(MO)戦、ラエ、サラモア、フィッシュハーヘンの戦いを経てマダンからの後退作戦、そしてアイタペ戦とマッカーサー率いる米豪連合軍との間で、1945年8月15日の終戦まで戦いが続けられた。

連合軍の優勢な戦力の前に日本軍は次第に制海権・制空権を失って補給が途絶し、将兵は飢餓や過酷な自然環境とも戦わねばならなかった。

ニューギニアに上陸した20万名の日本軍将兵のうち、生還者は2万名に過ぎなかった。本作戦には、高砂義勇兵、朝鮮志願兵、インド兵も本戦闘に参加している。

2 初期作戦後の戦争指導構想の破綻？

初期進攻作戦の目的は、南方資源地帯の確保であり、戦略守勢に転じるべきと主張する陸軍と、飽くまでも積極作戦を追求して更に前方要域に進出して態勢を採るべしと主張する海軍の考えの整合性を徹底的に図ることなく行われたニューギニア作戦、米豪遮断(MO及びFS作戦)作戦だった。

3 ニューギニア戦場の過酷さ 悪疫瘴癘の蛮地、現地調達困難、食糧尽き自活へ、動物・昆虫食、兵要地誌すらなし、探検記を参考にした。

4 ガ島奪回作戦とポートモレスビー攻略戦の二正面を強いられての苦戦

“海軍が陸軍に通報することなく”と云われるガ島への飛行場設営と米軍の上陸への対応作戦との二正面作戦を強いられ、苦戦が倍増した。海軍に振り回された感がある。

5 辻参謀の横暴：ポートモレスビー攻略の南海支隊に軍司令官から命じられていた作戦のための事前偵察を中止させ、即時攻略命令を出した。無謀且つ理解不能

6 集団投降事案(竹永事件)：1945(S20)年5月3日、連隊主力からはぐれた竹永中佐以下50名が日本軍としては珍しい集団投降をした。

7 航空戦の帰趨：当初拮抗していた航空戦力が、連合軍優位になり、戦域における制空権は米豪軍に帰した。ニューギニア沖海戦では日本優位であったが、1942(S17)年5月の珊瑚海海戦で空母と艦載機多数を喪失し、MO作戦は中止せざるを得なかった。制海・制空権なき陸軍作戦は、増援無く補給なく、非常に厳しいものとなった。

8 豪の積極的参戦を防止し得ず

豪の防衛ラインは、ニューギニア及びソロモンである。そして、ラバウルは、豪州防衛の警戒陣地ともみるべき要衝とも指摘される。斯様な全般態勢下で、海軍が指向した第二段作戦は、豪州をして、宗主国である英国に義理立てしての戦い(?)から祖国防衛戦争へと一気に転回させるのである。政戦略の不適と云うべきか。

9 優先的復員：過酷な戦場だったが故に優先的に復員が為された。

* 攻勢終末点を越えての作戦は矢張り無理だ。陸海軍の意思疎通・連携が良くても無理？
(第百八十一話 了)